

三年前の五月叔父の幼児が死んだ。顔すら知らなかった子供にもあふる、愛情を感じた。

### 麗かな巡査に道を問はれけり

一面淋しがりやの神経質の癖に一方莫迦に呑気な所があった。外出すると終電でなければ戻らなかつたが、外泊はしなかつた。電車がなくなれば必ず歩いた。月夜であれば月を浴びて詩を思ひながら戻つて来た。時には自動車を飛ばして来た事もあった。水巴先生のお心づかひに外ならなかつた。

「先生のお心は嬉しいが恐縮して了ふ。歩く方が気が置けなくていい」

よく言ひ言ひした。その言葉を繰返さねばならぬのに又自動車の響を深夜の郊外にひびかせた。

外出の時にはきつと何か珍らしい菓子を求めて来るのが癖であつた。

「お茶を入れやう。」

緑茶を汲みながら、訪問先を中心に話が拡がってゆくのだつた。

かうした兄との話の間に私は曲水の方々を知つた。現存の方々は勿論、いま思ひ出すのに左衛門先生もある。

人を訪ねるのは夜に定まつてゐた。殊に二、三年来はさうであつた。しかも夕飯をすましてから仕度するのだからいざ出掛ける時は八時か九時になつた。

ある夜十時に家を出て中野に住む音楽家の中山晋平氏を訪ねた。二時間も立つと珍らしく戻つて来た。私の問ひに、

「寝てゐたから止めて来た。とても早寝だ」

兄の返事に思はず吹き出さずには居られなかつた。夜半近く人を訪ねる呑気さを思ふと微笑を禁じ難い。

### 菘虫のいとなみよ秋の深みたれ

兄は名利に極めて恬憍であつた。自分の作品の発表の好機会も容易に逃がしてゐて平氣であつた。決して求めやうとしなかつた。

「よいものさへ書いとけば。」

兄の言ふ言葉はいつも同じであつた。此言葉を常に教訓のやうに私は聴いた。何かいいものが完成した時の喜びは非常なものであるらしかつた。

物事を頼まれても一度は必ず辞退した。

「揮毫など殊更だ、一度は辞退しなくっちゃ」

此言葉も聴いた。余程興が湧なくては筆を執らなかつた。兄の座辺に揮毫の依頼を受けた短冊がよくその俣に見出された。

### 薔薇畠の日の出涼しく父もゐたり

兄は今の世の中には純真すぎる人間であつた。正直過ぎた為に、人の厚意を無にした事も多かつた。又自ら怒らねばならなかつた。

そして人を信じすぎて失敗を繰返した。物質上の損失は勿論、名誉まで傷けられてもその人を憎まなかつた。

人を愛し、人の心を外らさなかつた。どんな不快な時でも、客があれば常の如く客を遇した。直ぐに笑顔が浮び、諧謔が出、皮肉を込へらした。人さへ居ればそれでよかつた。迷惑を感じさせるまで客